

『本院侍従集』はどう読めるか

一 研究史の問題点

『本院侍従集』は、三十九首の小家集ながら、時に「悪女」と評された本院侍従の集として注目され、本格的な注釈書も『本院侍従集全釈』(以下『全釈』と略称⁽²⁾)と『海人手子良集 本院侍従集義孝集全注』(以下『新注』と略称⁽³⁾)が刊行されている⁽⁴⁾。

本院侍従の家集の存在を伝える最古の資料は、『為信集』⁽⁵⁾の贈答歌である。

ふみなどやりし人、あまになりて、本院侍従がしふやある
といふ返事に

世中をきみがそむきしその日よりわが人しれぬしふもたえにき
返し

人ごとにきみがとどむるしふなればおぼろけにてはたえじとぞ
おもふ
(八五―八六)

兼 築 信 行

この為信について、『和歌文学大辞典』⁽⁶⁾は次のように記す。

藤原文範男。母は越前守藤原正茂女。紫式部母方の祖父(尊卑分脈)。紫式部祖父為信とは同名異人とされた時期もあったが、その根拠となった『為信集』の「花山院はうし」は、「法事」(一周忌)ではなく、花山院が出家して一時籠もっていた比叡山東塔東谷神蔵寺「かまくら」にあった「茅茨」(＝草庵)あるいは「坊址」。為信を花山院崩御(寛弘五1008年)以降も生存していた人物とする必要はない。為信の手に『本院侍従集』があった(為信集)のは、本院侍従の子知光が文範の養子(尊卑分脈)となったことに因る。蔵人(村上天皇御記)、右近少将、右馬頭を歴任(尊卑分脈)、常陸介だった永延元987年正月一〇日、出家(小右記)。(笹川博司)

十世紀末までには成立、存在していたことが確認できる。時代は下り、本院侍従の名は『和歌色葉』が「名誉歌仙」に挙げ、藤原定家筆『集目録』⁽⁷⁾は女性歌人家集群の冒頭(五七)に登載する。ただ

現在、明確に定家本と認定された『本院侍従集』の伝本は確認されていない。『集目録』は、『新勅撰集』撰集のための資料を定家がリスト・アップしたものとする可能性は大きいというほかないとされる⁽⁸⁾。本院侍従は『後撰集』初出の勅撰歌人だが、『本院侍従集』の歌が勅撰集に採られるのは『新古今集』からで、家集二―三番贈答が、『新古今集』恋一の一〇〇六―七に見え、その撰者名注記はともに定家である⁽⁹⁾。『新勅撰集』では、家集巻頭歌(一)が恋一・六三八に載る(作者は忠義公＝藤原兼通)ほか、本院侍従歌が四首採られており(春下・一二二、恋一・六四〇、恋二・七一七、恋五・一〇一四)、定家注目の女性歌人であつたらしい。しかし、『為信集』所掲、また定家所持の『本院侍従集』がどのような内容・系統の本であつたかは分明ではない。

『本院侍従集』の現存伝本には、流布本とされる穂久邇文庫本(以下穂久邇本と略称⁽¹⁰⁾)の系統諸本と、冷泉家時雨亭文庫本(必ずしも適切ではないが、穂久邇本と併称する便宜から、以下冷泉家本と略称⁽¹¹⁾)及びその転写本(書陵部甲本⁽¹²⁾)の、二系統がある。注釈書のうち、『全釈』は流布本系の松平文庫本に拠り、『新注』は冷泉家本に拠る。穂久邇本は鎌倉時代後期の古写であり、冷泉家本は室町時代中期の写という。ちなみに表記は、冷泉家本は定家仮名遣いで記されるが、穂久邇本は定家仮名遣いではない。両者は、収録歌は同一であるものの、多くの本文異同が存する。この異同に関し従来の研究は、庄司敏子が「二系統の伝本の都合のよい記述のみを選んで論

じてきた」、二系統ある本文をきちんと整理せず、都合のよい部分のみを使用してきた」と指摘する通り問題があつた。⁽¹³⁾

磯村清隆⁽¹⁴⁾は、本集を私家集として取り扱うことに疑義を呈し、歌頭が詞より高くなる歌集型の書式を、歌頭を詞より低く記す物語・日記型の書式に書き改め検討しているが、本集の本来の性格を「物語」と見定めつつ、しかし「物語内容を語ってゆく散文の分量(従つてその情報量)は、明らかに貧弱」で、「散文の力そのものによつて物語内容を具体的に詳しく語り紡いでゆこうとする方法意識は、希薄」と述べ、登場人物の「思い」は、「贈答歌そのものに歌い込められている情報」に現われているとした。そして、「歌自体を(読む)ことによつて、この二人の間での恋がどのように進展していったかが、読者の脳裏に再現され」、「散文によらない(語り)、いわば「和歌をメディアとした物語」の一つの極限形態」を示すものと結論付けた。この指摘は正鵠を射た見解である。しかし、そもそも和歌とは、それ自体が本来的にメディアなのであつて、そこに込められるのは、『古今和歌集仮名序』の冒頭を持ち出すまでもなく「人の心」にほかなるまい。そうした和歌を編集したものが歌集なのであつて、『本院侍従集』の本体は、紛れもなく、その収録歌そのものとなる。つまり読者として読むべき対象は、和歌の中身、内容、表現である。それを敢えて物語と捉え直す必要はなく、あくまでも歌集、私家集として扱い、その達成度・完成度を検討・吟味して評価を与えることこそが、正当なアプローチではないだろうか。

二 構成内容

『本院侍従集』は、すべてが贈答歌から構成されている。時に贈歌のみで、返答の歌が無い場合（三、八、二五、三〇、三九）もあるが、次郎君（藤原兼通）と女（いとこ）、ないし友達・御達と次郎君との贈答が連ねられていく。このように、すべてが贈答歌であることは、集の主題がコミュニケーション、すなわちメッセージの交換にあることを意味する。全体の内容は、大きく、次郎君と女との贈答部分（一～三四番歌）と、女との恋が破局した後の、次郎君と友達・御達との贈答部分（三五～三九番歌）に分かつことができる。この二つの部分の詠時には、時間の懸隔があり、前段はさらに、三つに分けるのが妥当であろう。それは、『全釈』収録の中嶋眞理子「本院侍従集考」が示す第一章～第四章の四部構成と一致するが、⁽¹⁶⁾私に新たな見出しを付け、Ⅰ～Ⅳと称しておきたい。【Ⅰ内には、歌が送られる方向性を示した。

- Ⅰ 求愛する貴公子次郎君（一～一二）【次郎君→女】
 - Ⅱ 房事の成就と後の交情（一三～二七）【次郎君→女】
 - Ⅲ 奪われた女、破局の後（二八～三四）【女→次郎君】
 - Ⅳ 破恋者次郎君への問訊（三五～三九）【友達・御達→次郎君】
- Ⅰは一番歌詞書に、穂久邇本では次郎君すなわち兼通を「年十八ばかり」と記し、恋の始発が天慶五年（九四二）であったことが示

される（冷泉家本では「まだわかうて」と臆化される）。このことは、続いて「冠」を得る以前と記され、兼通が叙爵する天慶六年（九四三）正月七日より前、すなわちこの恋は、おそらくは次郎君にとって、人生初の本格的な恋愛であったことが示唆される。以下、本集に言及される人物は実録性が高く、上達部（藤原師輔）、祖父（藤原忠平）、妹（藤原安子）、后腹（藤原穩子）、親王（成明親王、後の村上天皇）、親（冷泉家本。穂久邇本は「服」と表現。兼通の母藤原盛子）などが比定される。ただし実名は次郎君のみ、最後の一文において明かされる。次郎君の恋の相手は本院侍従と理解するのが一般的だが、朱雀天皇の女御藤原慶子（実頼女）との、いわば禁断の恋を描いた作品と解する大貫正皓の新説が発表された。⁽¹⁷⁾

時間構成に立ち戻ると、Ⅲの終り（三三～三四番歌）は、兼通母の藤原盛子が天慶六年九月十二日に死去した（『願文集』⁽¹⁸⁾）後の弔問贈答であるから、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲは天慶五～六年、兼通十八～九歳時の恋の顛末となる。Ⅳは、この問訊が行われた頃に次郎君は兵衛佐に任官したと記す。兼通は天曆二年（九四八）五月十二日に左兵衛佐となる（『公卿補任』）ので、破局後、五年ほどが経過した時点である。そして最末尾の一文、穂久邇本は「堀河大納言とかや」、冷泉家本は「いまはほりかはの中納言とかや」にいたって、次郎君の実名が明かされる。兼通に大納言となった経歴は無く、天禄三年（九七二）閏二月十九日に権中納言となり、同年十一月二十七日、中納言・大納言を経ず関白、内大臣となっている（『公卿補任』）。すな

わち、穂久邇本の「大納言」は誤認あるいは誤記ないし誤写かと考えられるが、冷泉家本の「いま」は天禄三年（兼通四十八歳）、つまり『本院侍従集』の現在には、同年内に限定される。これは、冷泉家本冒頭の書き出し「いまはむかし」の「いま」に正しく照応し、換言するならば、冷泉家本は、首尾極めて整った姿を呈する。

ともあれ、天禄三年の現在から、三十年程の「むかし」、天慶五（六年）、成就しなかった十代の恋の顛末、そして破局後しばらく時間をおいた天暦二年時（兼通二十四歳）の心境を、「いまはむかし」の贈答歌集として編み、提示したのが、この作品となる。

贈答の構造を見ても、Ⅰ・Ⅱでは能動的に次郎君から女へ歌を贈るが、Ⅲ・Ⅳでは、歌を贈るのは女、友達・御達であり、能動から受動へと、次郎君の態度は変化する。

以下、こうした内容・構成を全体的に再検討したいが、その際には、穂久邇本と冷泉家本とを都合よく校訂・混態させるのではなく、それぞれを完結した独立テキストと扱い、その上で、比較を行う。そのため、本文対照では、上段に穂久邇本、下段に冷泉家本を示す（両本を以下、穂本・冷本とも略称する場合がある）。それぞれの本文は適宜整定し、漢字・仮名を当て、句読点を施し、会話等には鍵括弧を付す。欠脱などを最低限補う必要のある箇所は丸括弧に括り、本文の問題箇所等には右傍線を付し、後に＊印で注記する。なお和歌には敢えて句読点を付した。いかにも乱暴な措置だが、和歌とは文によって構成される言表であり、始原的には音声で発出されるも

のであって、享受者はそれを歌頭から順に（耳で）捉え、その順序の通りに（脳内で）組み立てていく理解過程を、第一次的に想定すべきであると、考えるからである。いわば、釈迦空の短歌作品表記に施されているような処理¹⁹を行うことで、コミュニケーションの核に納められているそれぞれのメッセージを、より端的に、見えやすくする試みとして、実験的に行ってみた。

三 求愛する貴公子次郎君（Ⅰ）

〔穂久邇本〕

おほえおほしける上達部の
次郎なりけるが、まだ年十
八ばかりなりけるが、おほ
えいとかしこかりけれど、
冠得ぬ、ありけり。祖父は
太政大臣にてなんおほしけ
る。妹は后腹の親王に奉り
て、藤壺にぞ候ひたまひけ
る。御いとこ候ひたまひけ
り。それ、この次郎君思ひ
掛けたまひて、かく詠みて
入れたまひけり。

〔冷泉家本〕

今は昔、上達部の次郎なる
人、おほえいとかしこかり
けれど、まだ若うて、冠も
得ぬ、おほしけり。祖父は
太政大臣にてなんおほしけ
る。妹は后腹の親王に奉り
たまひて、藤壺にぞ候ひた
まひける。その御いとこ候
ひたまひけり。（それ）、こ
の次郎君思ひ掛けたまう
（て）、ものなど言ひて、か
く詠みて言ひ入れたまへり。

色に出でて今ぞ知らする。人知
れず思ひわびつる深き心を。

(一)

などのたまで、「御里はい
づくぞ」とのたまひければ、
女、細殿にてもものなど言ふ
に、

我が宿はそこともなじか教ふべ
き。言はでこそ見め。尋ねけり
やと。(二)

男、

我が思ひ、空の煙とたぐひなば、
雲居なりともなほ尋ねてん。

(三)

また男、

我ならぬ人は待つとも、杉樽は、
命を捨てて引く方に寄れ。(四)

返し、

君ならぬ人は待たねに、杉樽の、
引くとて寄らむ、心弱さよ。(五)

色に出でて今ぞ知らする。人知
れず思ひわ(び)つる深き心を。

(二)

など聞こえたまうて、「御
里はいづくぞ」とのたまひ
ければ、女、

我が宿をそことも何か教ふべき。
言はでこそ見め。尋ねけりやと。
(二)

我が思ひ、空の煙となりぬれば、
雲居なりともなほ尋ねてん。

(三)

また男、

我ならぬ人は待つとも、杉樽の、
命を捨てて引く方に寄れ。(四)

返し、

君ならぬ人は待たねど、杉樽の、
引くとて寄らん、心弱さよ。(五)

*一・詞：穂本「次郎」原表記は仮名書き「し、う」とも読め

るが、「しらう」と判読する。冷本「それ」文字欠損。冷本「て」
文字欠損。

*一・歌：冷本「おもひ。つる」の補入を「わひ」と校訂。

*二・詞：穂本「のたまで」は促音無表記あるいは「のたまう
て」の「う」字欠落か。

*五・歌：穂本原表記「またねに」は「またぬに」あるいは「ま
たねと」の誤か。

既述の通り、冷泉家本の書き出し「今は昔」は、最末尾文の「今
は」に呼応しており、整備された体裁を示す。対する穂久邇本は、
「おほえ」云々が次郎君のみならず父の上達部についても冠され、
やや洗練されない印象がある。大きな相違は、これも既述したが、
穂久邇本が「年十八ばかり」と年齢を明記するのに対し、冷泉家本
は「まだ若うて」と臆化する点である。『新注』は「これは元来、
底本（兼築注・冷泉家本）のように年齢は書かれていなかったとこ
ろに、後人が史料によつて注記したものが本文化したと考えるべき
であろう」と記す。しかしそれが何についての「注記」だったのか
不明で、次郎君の人物造型の相違と見るべきであろう。その一方、
記述される要素は両本間かなり同文的であることも、確認しておき
たい。恋の相手たる「いとこ」に敬語が付されることに着目し、前
掲、大貫正皓のように女御藤原慶子（実頼女）とする説も出されて
いるが、次郎君に対する敬意に引かれ、その血縁者として敬語が付

加されたと考えることもできる。もしも「いとこ」が女御慶子であるならば、穂久邇本二番歌詞書に記す「細殿にてもものなど言ふ」状況は不自然である。この「ものなど言（ふ）」の記述は、冷泉家本では一番歌詞書にあり、穂久邇本は一番歌を書き贈ったと読めるが、冷泉家本では口頭で言い入れたように読める。「いとこ」はこの時点で、天慶三年（九四〇）四月十九日に成明親王（後の村上天皇）の御息所となり（『日本紀略』、『大鏡』裏書、『西宮記』）、内裏に住む安子に仕え、細殿に局を得ていた女房と解しておくのが、まず素直な読みではある。しかし後掲二番歌詞書で、内裏を退出した女は、自身の里ではなく本院に入る。本院は、天慶四年（九四一）二月二十二日に朱雀天皇へ入内し（『大鏡』裏書、同年月十六日に女御となった（『日本紀略』、『二代要記』）慶子の里第と考えられ、この間に女が安子から慶子へ主家を変えたと考えるのも不自然で、そもそも女は慶子に仕えており、「（その）御いとこ候ひたまひけり」は、「同じく内裏には、次郎君兼通とその妹安子の）御いとこ（にあたる女）が（女御のもとに）仕えていらっしゃった」と解釈できるのではないだろうか。²⁰

さて二番歌詞書で、次郎君は女に「御里」を尋ねているので、相手の出自を知らなかったことになる。あるいは里下がりする際の居所を尋ねたというのだろうか。歌自体は率直で直球的。「色」と「深き」が縁語となるが、いかにも初々しい、若者らしい一首と言える。女は次郎君の告白を軽くない。恋の始発の、女歌の常套であろう。

三番歌は女が「雲居」つまり宮中に居ることを示すが、返歌は得られない。選択権、主導権は女が握る。四番歌では「杉樽」を「引く」とのあやを持ち出し、女はそれに対して気を持たせつつ応答した。一番歌に比して、四番歌は修辭に意が用いられている。「そま山にたつすぐれのおもておもて人にひかるる君はたのまじ」（古今六帖・一〇一六）あたりを学んでいるか。

〔穂久邇本〕

男に、遣戸をいささか開けてもの言ひけるに、ひとことも慎まじうおぼえて、
「胸いたし、焼け石当てむ」
とて、入りにければ、男、
わびて去にけり。またの朝に、
逢はずして帰りしよりも、いとどしく苦しと言ひしことぞわびしき。（一六）

返し、

寝ぬる夜のくるしきことは、とふことのおこたる折ぞうれしかりける。（七）

〔冷泉家本〕

男に、遣戸の狭間をいささか開けてもの言ひける人、こと睦まじうおぼえければ、
「胸いたし、焼け石当てむ」（と）て、入りにければ、男、わびて去にけり。つとめて、文おこせけり。
逢はでしも帰りしよりも、いとどしく苦しと言ひしことやわびしき。（一六）

返し、

ねぬなはのくるしきことは、とふことのおこたることぞうれしかりける。（七）

男、

寝ぬる夜のくるしきことのおこ
たるは、我が隠れたるしるしな
るらん。(八)

返り事なし。男、

身を捨てて露のみに消えぬ
とも、あはれてふべき人の無き
かな。(九)

女、返し、

夏の夜の露とおき居て、明して
は、あやなく我や濡れ衣を着ん。

(一〇)

とてまかでにければ、朝に。
女の里にはあらで、本院な
りけり。

柚山の流れ来る間を君は知れ。

我下り立てて筏士はせむ。(一)

(一)

返し、

筏士の心のすぎば、柚山の川の
ひぐれもよそこにこそ見め。(一)

(二)

また男、

ねぬなはのくるしきことのおこ
たるは、我が隠れたるしるしな
るらん。(八)

また男、

身を捨てて露のみに(て)は消
えぬとも、あはれてふべき人の
無きかな。(九)

返し、女、

夏の夜の露と思ひて明かしては、
あやなく我や濡れ衣を着ん。

(一〇)

とて、女のまかり出でにけ
れば、朝に。女の里にはあ
らで、本院なりけり。

柚川の流るるくれを君は待て。

我下り立ちて筏士はせん。(一)

(一)

返し、

筏士の心し澄まば、柚山のくれ
をも我はよそこにこそ見め。(一)

(二)

*六・詞：冷本「。いりにければ」の補入を「とて」と校訂。

*九・歌：冷本「露のみとは」に傍記「字落歟／自筆の本の
ま、」とあり、「とては」と校訂。

*一二・歌：穂本「かは」は「よは」のようにも見えるが、「か
は」と判読。

Iの後半に移る。六番歌詞書の「遣戸」は、穂久邇本「細殿」(二・
詞)にあった女の局の戸であろう。「慎まじう」か「睦まじう」か
の異同はあるが、人目を憚り、胸が痛いので療治を行うことを口実
に、女は局に引き籠り、次郎君は退去する。男から、逢瀬が遂げら
れなかったことよりも貴女の体調が悪かったことが心配だとの歌
(六)が届けられ、女は、苦しかったので帰ってくれたことが嬉し
かった(七)と、相手の気持ちから身をそらしてみせる。女の返歌
(七)の表現を受け、男から、貴女の具合がよくなったのは、自分
がおとなしく引き下がったお蔭だとの歌(八)を送るが、返事は来
ない。贈答が成立している間は、内容如何に関わらず、コミュニケー
ションが成立、進行していることになるが、返歌が無いのは、女が
男の歌に鼻白んでみせたということである。この七／八番歌の贈答
の初句にも、穂久邇本「寝ぬる夜の」、冷泉家本「ねぬなはの」の
異同がある。「ねぬなはの」は「くるしきこと」の「くる(繰る)」
を導く枕詞であると同時に、「寝ぬ名」を響かせ、より修辞技巧的

だが、穂久邇本の本文であつても意は素直に通じる。冷泉家本の方が、より技巧的な表現となっている。

さて返事が来なかつたので、次郎君はまた訴嘆の歌（九）を送り、これに女は返歌するが（一〇）、共に夜を過ごせば濡れ衣を蒙ると言い、やはり身をそらす。女の歌に「夏の夜」とあるので、夏の出来事であつたことになる。

九〇番歌贈答の後、女は内裏を出て本院に入った。本院は「中御門北、堀河東一町」の「左大臣時平ノ家」（『拾芥抄』）であり、藤原実頼が時平女を北方とし、実頼女の朱雀天皇女御慶子が里第としていたのだろう。この時点で女は確実に女御慶子に仕えていたことになる。

ともあれ、その本院に移った女の許へ、次郎君は一一番歌を送り、一二番歌の返事を得る。四〇五番歌贈答で交わした「杉搏」の歌を踏まえるが、穂久邇本と冷泉家本との間に、また大きな異同がある。一一番歌、冷泉家本「くれ」に、「搏」と「暮れ」を掛ける。また穂本「下り立てて」、「下り立ちて」の「立つ」は、時代が下るが「滝つ瀬にたたむ筏の徒にとはれぬくれをかさねつるかな」（草庵集・九六二、寄筏恋）、「いかだこそ山山川のはやき瀬にたつはあやふき世を渡りつつ」（頓阿句題百首・世路山河嶮・四四八・良春）のよきに、筏を流すことを言う。一二番歌も異同が大きいが、穂久邇本は「杉」「檜搏」を掛けているように思われる。「くれ」には当然「暮れ」と「搏」が掛かる。この贈答は意が取りにくい、男が主導権

を取ろうとし、女はやはり、身をそらしているのだろう。

四 房事の成就と後の交情（Ⅱ）

〔穂久邇本〕

さて、「もの聞こえむ」と
切にのたまひければ、ただ
「物越しにて承らむ」とあ
りけるに、この女の使ひけ
る人を語らひて、入りたま
ひにけり。さらに人も知ら
ぬことなりけり。またのつ
とめて、男、

露のおきて飽かぬ心に別かるれば、
我が衣手ぞ乾かざりける。

（一二）

返し、

衣手の濡ると聞くにも、いとど
しく、我さへ夏の夜ぞ憂かりけ
る。（一二）

男、独り寝て、またの朝に、
袖濡れて干しぞわづらふ。唐衣、

〔冷泉家本〕

さて、「もの聞こえん」と
切にのたまひければ、ただ
「葎越しにて承らん」とあ
りけるに、この女の使ひけ
る人を語らひて入り給ひに
けり。さらに人も知らぬこ
となりけり。またの朝に、
男、

露のおきてあかぬ心に別かるれば、
我が衣手ぞ乾かざりける。（一

三）

返し、

衣手も濡ると聞くにも、いとど
しく、我さへ夏の夜ぞ憂かりけ
る。（一四）

男、ひと夜寝て、またの日、
袖濡れて、干しぞ煩ふ。唐衣君

君が手枕触れぬ宵には。(一五)

返し、

我がために思ひしあらば、よそ
にても、君が袂はぬれじとぞ思
ふ。(二六)

男、

忍びつつ、長き夜すがら恋ひわ
びて、涙の淵と浮かびてぞ経る。

(二七)

返し、

浮かびても君は寝にけり。いか
なれば、露とおき居て泣き明か
すらん。(一八)

が手枕触れぬ宵には。(一五)

返し、

我がために思ひしあらば、よそ
ながら、君が袂は濡れじとぞ思
ふ。(二六)

男、

忍びつつ、闇の夜すがら恋ひわ
びて、涙の淵と浮かびてぞ寝る。

(二七)

返し、

浮かびても君は寝にけり。いか
なれば、いつも起き居て泣き明
かすらん。(一八)

*一七・歌：冷本「闇の」を、『新編私家集大成』(片桐洋一)、

『新注』ともに「夢の」と翻刻。冷本の転写本である書陵部

甲本は「夢の」とする。

さらに求愛の度を強める次郎君に対し、女の守りはなお堅い。一
三番歌詞書、穂久邇本「物越し」、冷泉家本「葎越し」では、後者
の方の防御がより具体的かつ堅固である。それでも男は、女に仕え
る者を語らい、ついに房事を遂げる。「さらに人も知らぬことなり

けり」は両系統に同文である。しかし、『朝忠集』に次の歌が載る。

本院のじじゅうとかね道のきみとねたるをたちぎきて

よそにわれ人とひととをききしかばあはれとも又あなうともお
もふ

又おなじ女に

いはでのみ思ふ心をする人はありやなしやとたれかとはまし

返し

しる人やそらになからん思ふなる心のその心ならでは

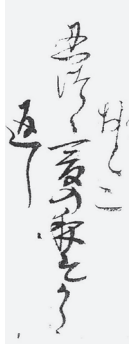
(朝忠集・二二―二四)

だが『本院侍従集』は、この房事はまさに密会であつたとする。女
の一四番歌に「夏の夜」とあつて、一〇番歌同様、夏の出来事であつ
たことが分かる。「いとどしく」は、男の六番歌の表現と呼応する。

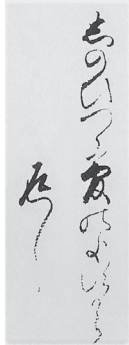
一五番歌詞書によれば、男は連夜、女の許へ通つていない、いや、
通えないのであらう。房事の場合は、前段の状況から、本院であつ
たように読める。以後、二五番歌まで贈答は途切れることなく連鎖
していく。コミュニケーションが成立しており、関係が維持されて
いくが、一五番歌で身体接触のない時は涙に暮れていると直截に言
いかける男に対し、一六番歌は自分への「思ひ」の「火」があるな
らば離れていても涙の袖は(乾いて)濡れないでしょうと、女はい
ささか意地悪く返している。男は貴女を抱きたいと言ひ、女は私を
愛しているのは分かるけれど…と、そこに冗談を絡める。贈答の呼
吸を追えば、女の手管のほうが一枚も二枚も上手である。

一七番歌の第二句、穂久邇本の「長き夜すがら」の措辞は、『本院侍従集』の例が古いが、『蜻蛉日記』（中巻・一三六）や『能宣集』（西本願寺本・三〇八、御所本三十六人集本・三六二）の長歌に見え、「からころもながきすがらうつこゑにわれさへねでもあかしつるかな」（後拾遺集・秋下・三三五・資綱）以下、平安後期以降の用例は多い。一方、「闇の夜すがら」は「ただちをやなき跡までもまよふらんやみの夜すがら夢にみえつつ」（持為集Ⅱ・六八、題「夜夢」）の一例のみが検索できる。「夢の夜すがら」は皆無であるが、左掲のように、冷泉家本の当該文字には上に門構えが乗っており、これがなければ「夏」字のようにも見えるが、文字としては「闇」なのであって、「夢」とは読めない。

〔冷泉家本・一七番歌・初二句〕



〔書陵部本・一七番歌・初二句〕



書陵部甲本が「夢」と誤写し、それが影響して翻刻誤りが生じたか。「闇の夜すがら」は、下冷泉持為の詠作例が存することからも中世的な表現と言える。

同歌の「涙の淵」は、「あまのがはあさくふみつつわたるせにかへるなみだのふちとなりつつ」（家持集・二〇一）、「さだめなきよをきくころのなみだこそそでのうへなるふちせなりけれなどの」

（伊勢集・二二一、詞「ぶくぬぎてかへりし」）などの表現から生じたと考えられるが、この形での用例は『本院侍従集』が早く、以降、「影みえぬなみだのふちのころもでにうづまくあわのきえぞしぬべき」（斎宮女御集・四）、「たまさかにあふせはなくてみなのがはなみだのふちにしづむこひかな」（肥後集・一八六）、「こひわたるなみだのふちとなりはててあふせまれなるあまのがはかな」（初度本金葉集・秋・二四〇・勝超）と継承される。一八番歌は、貴方は寝られても私は寝られなかったと、今度は女の方から愛情を伝える。一七番歌末尾は「寝る」とする冷泉家本のほうが、女の返歌と整合的ではある。

〔穂久邇文庫本〕

男、

浮かびても袂のみこそ濡れ増され。我も寝られぬ。君恋ふる夜は。（二九）

女、

嘆きつつ、あなおほつかな。唐衣、濡れ増るらん袖を見ぬ間は。（二〇）

男、

朝ごとに干しぞわづらふ。我が

〔冷泉家本〕

浮かびても袂のみこそ濡れ増され。我も寝られず。君恋ふる夜は。（二九）

女、

嘆きつつ、あなおほつかな。唐衣、濡れ増さるらん袖を見ぬ間は。（二〇）

男、

朝ごとに干しぞわびぬる。我が

袖は、夜な夜なごとにそほち増されば。(二二)

返し、

干す人もありとこそ聞け。唐衣、薄くなり行く人の袂は。(二三)

男、返し、

袖は、夜々ごとにそほち増されば。(二二)

返し、

干す人もありとこそ聞け。唐衣、薄くなり行く人のためには。(二三)

(二三)

男、

人知れず有明の月と出でしかば、露も我が身も、おきぞ増される。

(二三)

女、返し、

夜な夜なになりぬと思ふ。はつゆきの、濡るらん袖も、あらじとぞ思ふ。(二四)

男、返し、

つみにのみ添はぬ夜聞くは、夜ごとに、露のおき居て、明かしこそすれ。(二五)

また男、出でて、すなはち、

ほのぼのと明け行く程は、うち嘆き、しのめよりぞ音は泣かれける。(二六)

人知れず有明の月のいひしかば、露ぞ我が身におき増さりける。

(二三)

返し、

夜な夜なになりぬと思へば、露のおきて、濡るらん袖も、あらじとぞ思ふ。(二四)

返し、男、

君が身に添はぬばかりを、宵ごとに、露のおき居て、明かしこそすれ。(二五)

男、出でて、すなはち、

ほのぼのと明け行く程は、うち嘆き、しのめよりぞ音は泣かれける。(二六)

女、返し、

返し、女、

なほざりに、しのめよりぞ明
けくれば、うは露ばかり置くと
言ふなる。(二七)

なほざりに、しのめよりは明
けくれば、うは露ばかり置くと
見えける。(二七)

*二三・歌：冷本「いひ」の「ひ」は「て」の誤写か。

*二五・歌：穂本初句、不審。

Ⅱの続き。なおも露（涙）で袖が「濡る」の表現を用いた贈答が続く。重要なのは、一五番歌以降、二人が直接会えない状況が贈答の前提にあることである。しかしコミュニケーション自体は成り立っていく。女の二〇番歌の「嘆きつつ」、会えないことを女の側も悲しんでみせる。女の二二番歌では、来訪が無いのは他に通う先があるからではと、男の薄情を疑う（『全釈』は、顕光母である元長（元平）親王女との結婚がこの時期かとする）。男の二三番歌は、後朝の所感であり、女の返歌（二四）は穂久邇本に「はつゆき」とある本文がもし正しければ、この時点で冬になっている。二四―二五番歌贈答で、再び会えない日々が示唆され、二五番歌、穂久邇本初二句は意が解し難いが、ここで、対する女の返歌は無い。そして二六番歌は逢瀬の直後に送った歌だが、退出が早く、曙には嘆き、しのめ時分から声を出して泣いていたと言い、時間が錯綜している。対して女は二七番歌で、「うは露」つまり上辺だけの涙ではと

相手突き放しており、二人の間に隙間風が吹き始めた感がある。

五 奪われた女、破局の後（Ⅲ）

〔穂久邇本〕

かくて住みたまふ程に、この女、また人に、盗みて去にければ、女、いみじう嘆きたまひて、女、あはれと思ひてなむ、かく言ひ遣りける。

〔冷泉家本〕

かくて住みわたりたまふ程に、この女をよばふ人、盗み持て去にければ、男君、いみじう泣きたまひければ、女、聞きて、あはれと思ひて、かくな言ひ遣れりける。

世の中を思ふも苦し。思はじと思ふも、身には病なりけり。（二八）

世の中を思ふも苦し。思はじと思ふも、身には病なりけり。（二八）

男、返し、

男、返し、

忍ぶれど、なほ忘れず。思はゆる病は君に我ぞ増される。

忍ぶれど、なほ忘れず。思はゆる病ぞ君に我は増される。

（二九）

（二九）

女、

また女、

思はずにある世の中の、苦しきに、増さる病はあらじと思ふ。

思はずにある世の中の、苦しきに、増さる病はあらじと思ふ。

（三〇）

この女、内にまかりければ、いといみじう遠くて、嘆きたまひける。久しうありて、女言ひたりける、

我が身ゆゑ憂しとは思ひ置きながら、つらきは人の心なりけり。（三二）

返し、

身の憂きと思ひ知りぬるものならば、つらき心を何か恨みむ。

（三二）

かくて、この女、服になり給ひぬと聞きて、とぶらひきこえたる返事に、「いつ

も時雨は」とのたまひければ、

ば、

我さへぞ袖は露けき。藤衣、君

織り截ちて着ると聞くには。

（三三）

返し、

（三〇）

この女、内に参りにければ、いといみじと思ひてぞ泣きたまひける。久しくありて、女言ひけるにや。

我が身ゆゑ憂きとは思ひ置きながら、つらきは人の心なりけり。（三二）

返し、

身の憂きと思ひ知りぬるものならば、つらき心は何か恨みん。

（三二）

かくてこの君、女、親の御服になりたまひぬと聞きて、とぶらひたてまつりたまひ

ける御返事に、「いつも時雨は」とのたまへりけるに、

女、

我さへぞ袖は露けき。藤衣、君

織り截ちて濡ると聞きしに。

（三三）

返し、

音にのみ聞きわたりつる藤衣、
音にのみ聞きわたりつる藤衣、
深く悲しと、今ぞ知りぬる。(三)
深くわびしと、今ぞ知りぬる。

四) (三四)

*二八詞：穂本「女」は「男」の誤りか。

Ⅲにいたって、次郎君と女との恋は急展開、いや破綻を見せる。

すなわち、女が「また人」(穂久邇本)、「この女をよばふ人」(冷泉家本)に盗み出されてしまうのである。この人物は、次掲『一条撰政御集』「とよかげ」に載る贈答と状況が符合するところから、兼通の一歳年上の同母兄、伊尹と考えられる。

とよかげ、なかのみかどわたりなりけるをんなを、いとしのびてはかなきところにあてまかりて、かへりてあしたにかぎりなくむすびおきつるくさまくらこのたびならずおもひわするな

かへし

くさまくらむすぶたびねをわすれずはうちとけぬべきこちこそすれ (三一～三二)

破局・失恋した次郎君に対して、今までとは逆に、女から歌が送られてくる。女の二八番歌は、仕方なかったとの言い訳めいた慰めだが、二九～三〇番歌と続けて、表出される「苦し」「病」の語句には、六～八番歌でのやりとりが想起されてこよう。三〇番歌に対

して、次郎君は返歌をしていない。返しようがなかったのである。

三一番歌詞書には、女が内裏に入ったことが記される。女御慶子に伺候するため、あるいは、慶子が内裏へ移徙するのに伴い本院から移ったのであろう。次郎君は、容易く接近できなくなる。「久し」とはどれほど時間を措いたか分からないが、数箇月か。そして女から同情、というよりも、貴方の辛さは自分のせいだと分かっているけれど、貴方も私をしつかり捕らえていなかったと言う、半ば言い訳めいた内容の歌(三一)が来て、次郎君は、貴女が本当に私の気持ちを持ちを分かっているなら、貴女の仕打ちを恨まないのだがと言う、反語の歌を返す(三二)。

さて次郎君の母盛子が天慶六年九月十二日に死去、三三～三四番歌はその服喪中の、女からの弔問歌と返歌である。三三番歌詞書に記す次郎君の返事「いつも時雨は」は、『源氏物語』葵巻、幻巻の引歌として『源氏釈』以下の注釈書が掲げる「神無月いつも時雨は降りしかどかく袖くらす(かく袖ひたす)折は無かりき」と考えられる(『新注』)。親の死に直面し、深い嘆きを初めて経験したと言う次郎君の歌は社交辞令的であり、二人の恋愛は完全に終息し、「いとこ」同士の関係に落着いたかのごとく見える。「いとこ」は父系のみならず母系をも称する語である。従来は師輔の兄弟の女子を候補として検討されることが多かったが、ここで盛子の死を悼むところから、母方の従姉妹も候補に加え再検討すべきか。

六 破恋者次郎君への問訊(Ⅳ)

〔穂久邇本〕

女友達のもとより、次郎君
のもとに、「この女の、ほ
かざまになりたる、いか
に思すらむ」とて、

ほかざまに靡くを見れば、塩竈
の煙やいとど燃えわたるらん。

(三三)

返し、

塩竈の燃ゆる煙も無きものを、
からき無き名も立つがわびしさ。

(三六)

とあれば、「まづ思すらん
ことこそおほゆれ」とて、
御方の御達の言ひ遣る、

初秋の花の心を、程も無く移ろ
ふ色を、いかに見るらん。(三七)

男、返し、

時分かず垣ほに生ふる撫子は、

〔冷泉家本〕

この女の友だちのもとより、
「次郎君の、元の女の、こ
とざまになりたること、い
かに思すらん」とて、

ほかざまに靡くを見つつ、塩竈
の煙はいとど燃え増さるらん。

(三五)

返し、男、

塩竈の燃ゆる煙もあるものを、
からき嘆きを焚くがわびしさ。

(三六)

とあれば、「なほ思すらん
ことこそおほゆれ」とて、女
の御方の御達の言ひ遣る。

初秋の花の心を、程もなく移ろ
ふ色を、いかに見るらん。(三七)

返し、

時分かず垣ほに生ふる撫子は、

うつろふ秋の程も知らぬを。

(三八)

また返し、

色変はる萩の下葉もあるものを、
いかでか秋を知らずてふらん。

(三九)

と言ひ遣る。

その頃、兵衛の佐になり給

ひにけり。堀河大納言とか

や。

移ろふ程の秋も知らぬを。(三

八)

また返し、

色変はる萩の下葉もあるものを、
いかでか秋を知らずと言ふらん。

(三九)

その頃、男君、兵衛佐にな

り給へり。

今は堀河の中納言とかや。

*三九・歌：冷本「知らず」、原表記「くらす」の「く」を「之」
に直すか。

*三九・左注：穂本「大納言」は「中納言」の誤りか。

三九番歌左注に兵衛佐になった頃とあり、既述の通りⅣは天暦二
年五月十二日頃、兼通は二十四歳、破局から五年ほど経過した時点
となる。ただし三七～三九番歌では「初秋」「秋」の植物が話題と
されており、実際には天暦元年の秋頃であつたかもしれない。女の
友達・御達は、本院侍従の同輩・同僚と考えるのが自然で、女御慶
子に仕える女房たちであろう（慶子は天暦五年十月九日に死去す
る）。冷泉家本三七番歌詞書の「女の御方」は、あるいは「女御」

の方なのかもしれず、ともあれ本院侍従の主家ということになろう。

三五―三六番歌贈答は、失恋なさったけれどまだ思いがあるのではと、意地悪く尋ねて来たのに対し、「塩竈」「からき」の縁語を効かせた、水準の歌を返している。三六番歌は穂久邇本と冷泉家本に大きな本文異同がある。穂久邇本では、もう恋慕の情は無いと言う。

冷泉家本では、まだ恋慕の火は燃えていると言ひ、「き(木)」を「焚く」と、ここにも掛詞を用い、さらに手の込んだ歌に仕立てる。

次郎君は、和歌が上達している。三七番歌以下の贈答も、次郎君に対して辛辣だが、女の気持ちも変わらないでしょうと、純情に、しかし、したたかに答えてみせた。三九番歌は御達からの、これまた意地悪な返歌。しかし、「いとこ」との恋の経験を通し、次郎君は成長を果たした。

末尾文の官は冷泉家本が正しい。同本は巻末に、兼通の履歴を付載する。権中納言の在任は、天禄三年の限られた期間、兼通が関白・内大臣に昇進する直前となる。これから一人の人となる人物の、若き日の恋の顛末という種明かしが、ここでなされるのである。ただし穂久邇文庫本が、強ち誤りとも限るまい。もともと、態と中納言を大納言に記していた可能性も考えられる。私家集にはそういう事例も、まま見受けられるからである(『建礼門院右京大夫集』の藤原隆信の表示など)。

七 どう読めるか

穂久邇文庫本(系)と冷泉家本の関係について、『和歌文学大辞典』が「冷泉家時雨亭文庫本の系統にはより古い形の本文が残され」(『本院侍従集』項、藤川晶子執筆)と記すように、後者を古態とみる説が近年では定着している。これは、『新注』の解説が「底本(兼築注・冷泉家本)の方がより古い形の本文を持つと思しき例がいくつか存する」と記し、冷泉家本の本文が穂久邇文庫本に対し優れている点を指摘したことを受けている(藤川も『新注』著者の一人である)。冷泉家本の影印解題(片桐洋一執筆)では、「一方が一方を物語化したというような関係ではなく、いずれもが、それぞれ異なった形で、より物語的にしようとしていた」と述べられていた。その一方で、『全釈』の解説「現存本『本院侍従集』の諸本について」の別表Ⅱは、冷泉家本の転写本である書陵部甲本(霊元天皇筆)を「(a)霊元天皇による改変か (b)本来の姿か」と注記し、系統図中の位置付けを保留している。もちろんその後、室町中期写の冷泉家本が出現したため、霊元天皇による改変はあり得ないこととなったが、冷泉家本の方を改変と見る考え方も、あり得たということである。そう思えば、今まで吟味してきたごとく、総じて冷泉家本の方が整備・洗練された本文を有しているのに対し、穂久邇本には、必ずしもそうではない箇所が認められた。七―八番歌の「寝ぬる夜」(穂

本」と「ねぬなは」(冷本)、一七番歌の「長き夜すがら」(穂本)と「闇の夜すがら」(冷本)などは、洗練の典例である。その一方で両系統本間には同文的要素も強く、つまりそれは、冷泉家本影印解題が述べるように、それぞれが元本を物語化したというのではなく、単純に一方が一方を書き改めたと考えるほうが、理解しやすいのではないだろうか。その場合、より整備され、洗練された方が後出であると、普通は判断すべきであろう。したがって穂久邇本の本文のほうが古く、冷泉家本はそれを改変したものと考えたい。一七番歌の「闇の夜すがら」も、冷泉家本が中世的である証左と言える。冷泉家本の九番歌傍記に「字落歟／自筆の本のま、」とある「自筆の本」は、親本の本文について冷泉家本書写者が記したのか、祖本の注記が転写されたのかは分からない。

『本院侍従集』から勅撰集に採られた歌は十五首ある(一首『続古今集』内で重出)。これらの本文を穂久邇本・冷泉家本と比較してみたが、どちらの系統に拠ったか、明瞭な結果は出てこなかった。入集に際し、勅撰集の撰者が本文を改める場合もあったろう。ただし一七番歌は、二条為定が撰者の『新千載集』に入集するが(恋二・一一八一)、第二句は「長き夜すがら」であり、このことは穂久邇文庫本系統に「右此本ハ二条家為定以自筆正本写之」の飛鳥井雅教元奥書を付す伝本が存すること(『全釈』)と符合する。なお勅撰集および私撰集入集歌との対校結果は一覧にして、本稿末に付載しておく。

冷泉家本は定家仮名遣いである。『集目録』に定家所持の『本院侍従集』が記載され、『新古今集』『新勅撰集』の撰集資料として同集が定家の手元にあったことは確実だが、冷泉家本がその本と直接結びつくかは不明である。たとえば『土佐日記』の藤原為家筆本(大阪青山歴史文学博物館蔵)は、紀貫之自筆本忠実に書写した本だが、その本文を持ちながら定家仮名遣いに改変された伝本が、宮内庁書陵部蔵冷泉為綱書写本(一五〇―七四三)など存在している。このように、定家自身ならずとも、写本を定家仮名遣い化することはあり得る。しかし冷泉家本は、末尾に兼通の経歴・勸物を付す。このような勸物は、『土佐日記』や『更級日記』の定家筆本にも見られる。ここで「闇の夜すがら」(一七)が中世的な匂いを発することを思い合わせるならば、平安期の古態は穂久邇本に留められており、冷泉家本はそれを中世に書き直したものであった可能性が浮上してくる。それを定家がなした可能性も、強ち否定はできない。

『本院侍従集』の主人公は、次郎君、兼通である。「じゅう」集なのではなく、『二条撰政御集』「とよかげ」を思い合わせるなら、実は「じらう」集だったのではないか(「、」と「ら」は誤写されやすい)と、つい妄想してみたくなる。その問題はさて措くとして、本集の時間的経緯は、兼通の実人生に照らし矛盾なく読むことができ、実録性が非常に高い。そしてその内容は、「いとこ」の女に迫り、房事を遂げるも、おそらく実兄(伊尹)に奪われて破局、女から歌で慰められたり、しばらく経って女の知友から失恋の心境を問訊さ

れたりと、端的に言えば「格好悪い」恋の顛末が記録されている。いま一度、家集内に展開する時間を整理しておこう。

一・詞：兼通十八歳（穂本） Ⅱ 天慶五年（天慶六年正月七日

叙爵以前）

一〇・歌：夏の夜

一四・歌：夏の夜

一七・歌：長き夜すがら（穂本）、闇の夜すがら（冷本）：秋？

二四・歌：はつゆき（穂本）：冬？

二八・詞：（女を奪われる）

三一・詞：「久しうありて」（穂本）、「久しくありて」（冷本）

三三・詞：天慶六年九月十二日：兼通母藤原盛子没

三七・歌：初秋（三八）三九・歌も秋を詠む）

三九・左注：天曆二年五月十二日：兼通任左兵衛佐

最末文：天禄三年閏二月十九日～十一月二十七日以前：兼通権

中納言在任

ところで堤和博は本集について、「兼通を貶める意図が働いた」と読み、「兼通は伊尹の後継者として相応しい人物ではないことを、文学の上で示そうとしたのが『本院侍従集』ではないか」と述べ、「兼通を貶めようとする兼家の意向を受けて編まれた」とする推考を提示した。²¹⁾しかし、そのような「政治的意図」を実現するために、政敵の若き日の恋の失敗を暴露するという手の込んだ操作を、このように完成度の高いテキストとして、一体どのようなコミュニケーション

に向けてなしたというのであろう。そして、誹謗中傷の効果は、果たしてあったのだろうか。

翻って、貴公子の十代の恋が不首尾に終わることは、果たして「格好悪い」ことなのだろうか。論証はなかなか難しいが、兼通の歌は、女そして友達・御達との贈答を通じて揉まれ、鍛えられ、明らかに上達していくように思われる。ここにはいわば、次郎君十代の恋を通しての成長、そして真摯で誠実、一途で純情な人柄が描出されているのではないか。本院侍従は、天慶六年（九四三）七月二十六日に死去した元良親王との間で贈答を交わしている（『栄花物語』『ひかげのかづら』、『古本説話集』『元良御子事』、新後拾遺集・恋三・一一四九。なお同歌は、元良親王集・三にも載るが、作者名は示されない）。「来や来やと待つ夕暮れと今はとて帰るあしたといづれまされり」と、親王が「あまた」の女性に贈った中で、本院侍従は「夕暮れはたのむ心に慰めつかへるあしたぞわびしかるべき」と返歌したという。本院侍従は説話化の中で多くの虚像を呈するが、この親王との贈答が事実であれば、既に歌名ある女に、青年兼通は挑んだことになる。貴公子の若き日の恋は、必ずしもうまくいくとは限らない。『源氏物語』における源氏の君が典例である。

『本院侍従集』の「今」が、兄伊尹が十一月一日に死去する天禄三年、その閏二月十九日以降十一月二十七日以前の、兼通が権中納言であった期間に絞られることは、やはり意味深長と言わざるを得ない。そうであるならば本集は、堤和博の所説とは逆に、兼通を称

揚・賛美する作品であつたと見ることも、可能ではないだろうか。

貴公子の若き恋が時に不首尾に終わる例に『源氏物語』を掲げたが、本稿第一節に述べた通り、『本院侍従集』を所持した人物に紫式部の祖父と考えられる藤原為信がいる。三三番歌詞書の次郎君の言葉には、『源氏物語』と同一の引歌が認められた。思えば源氏の君は、桐壺帝の「次郎君」である。本集が紫式部の手に渡り、源氏の君の造型に何等かの示唆を与えたとの妄想を巡らしてみたい誘惑にかられるが、これ以上は慎んでおこう。

しかし、『為信集』において尼から所望される『本院侍従集』は、女性が恋の主導権を終始握る家集として、女性たちに注目されたのではあるまいか。若き貴公子を翻弄する女の人物像は、確かに、場合によっては「悪女」と称してよいのかもしれない。しかし、後に天徳四年（九六〇）三月『内裏歌合』出詠の榮に浴する高名な女性歌人を恋の相手に歌を詠み交わし、破局するとは言え、いったん関係をとり結んだことは、若き日の恋の勲章と言っても差し支えあるまい。そのような見方、読み方で本集を捉え直す一案を、ここに提示しておきたい。

注

- (1) 稲賀敬二「悪女の条件―本院侍従―」（『国文学』二〇一六、一九七五年十二月）、鈴木紀子「王朝文学の〈悪女〉―本院侍従を中心に―」（『悪女の文化誌』二〇〇五年、晃洋書房）など。

- (2) 目加田さくを・中嶋眞理子「本院侍従集全釈」（一九九一年、風間書房）。

- (3) 片桐洋一・三木麻子・藤川晶子・岸本理恵『海人手子良集 本院侍従集 義孝集 新注』（二〇一〇年、青簡舎）。

- (4) 注(2)(3)の二書のほか、田中初夫「考注伊勢集及本院侍従集」（一九五六年、竜門山房）がある。伊藤一男「本院侍従集」注釈(一)（『東京学芸大学紀要・人文科学』三七、一九八六年二月）、同(二)（同三八、一九八七年一月）は、一四番歌まで注釈し中断する。

- (5) 以下、特に断らないかぎり、和歌の引用は『新編国歌大観』に拠る。

- (6) 『和歌文学大辞典』（二〇一四年、古典ライブラリー）。

- (7) 冷泉家時雨亭叢書14『平安私家集 一』（一九九三年、朝日新聞社）。

- (8) 同右書解題、片桐洋一稿。

- (9) 『新編国歌大観』解題所掲、谷山本に拠る。

- (10) 日本古典文学影印叢刊8『平安私家集』（一九七九年、貴重本刊行会）に影印。

- (11) 冷泉家時雨亭叢書23『平安私家集 十一』（二〇〇四年、朝日新聞社）に影印。

- (12) 函架番号五〇一―一九七。高橋正治編『本院侍従集 宮内庁書陵部甲本』（一九七三年、笠間書院）。現在、国文学研究資料館の新日本古典籍総合データベースからも画像にアクセスできる。

- (13) 庄司敏子「本院侍従集」の贈答歌―六・七・八番歌の解釈を中心に―（『平安朝文学研究』一七、二〇〇九年三月）。

- (14) 磯村清隆「本院侍従集における和歌の機能とテキスト言説」（『城南国文学』一五、一九九五年二月）。なおこうした疑義は、『全釈』所収の中嶋眞理子「本院侍従考」において、夙に示されている。

- (15) 稿者は、歌集の、歌の頭が詞に対し突出する書式を歌頭凸型、物語・日記等散文の、歌の頭が詞に対し陥没する書式を歌頭凹型と、私に称呼している。

- (16) 本集の構造を検討した最近の論に、松室重哉「『本院侍従集』の構造―場面による歌群認識―」（『国文学（関西大学）』一〇二、二〇一八年三月）

がある。

- (17) 大貫正皓「『本院侍従集』はどう読まれていたのか―「いとこ」の解釈をめぐって―」（和歌文学会例会発表、二〇二一年五月一日）。本集は小野宮家にゆかりある本院侍従の編、兼通を賛美する作品であるとした。

- (18) 『大日本史料』第一編之八所引。

- (19) 釈迺空『海山やまのあひだ』「この集のすゑに」（『折口信夫全集24』一九九七年、中央公論社）。なお近時、本論文と同様、和歌本文に句読点を施した小田勝『百人一首で文法談義』（二〇二一年、和泉書院）が刊行された。

- (20) 女御慶子については、島田とよ子「藤原実頼の娘たち」（『大谷女子大國文』一六、一九八六年三月）参照。

- (21) 堤和博『歌語り・歌物語隆盛の頃―伊尹・本院侍従・道綱母達の人生と文学―』（二〇〇七年、和泉書院）。

【付記】

資料画像の掲載に許可を賜った冷泉家時雨亭文庫、宮内庁書陵部に、感謝申し上げる。

【付表】 勅撰集・私撰集入集歌との本文比較

勅撰集名	部立	歌番号	勅撰集本文	本院侍従集	穂久邇本	冷泉家本	備考（他出の異同など）
新古今集	恋一	1006	宿は	2	宿は	宿を	
			何か		なじか	何か	
			いづく		いづく	いづこ	
	恋一	1007	なりぬれば	3	たぐひなば	なりぬれば	
			ながらも		なりとも	なりとも	
新勅撰集	恋一	638	異同なし	1	—	—	
新後撰集	恋二	729	異同なし	20	—	—	
続古今集	恋四	1221	見つつ	35	見れば	見つつ	
			煙や		煙や	煙は	
	恋四	1229	憂さを	32※	憂きと	憂さを	万代集・恋五・2589「憂しと」 新時代不同歌合・109「憂しと」
			心を		心を	心は	万代集・恋五・2589「心を」 新時代不同歌合・109「心も」
	恋五	1370	憂しと	32* 重出	憂きと	憂さを	万代集・恋五・2589「憂しと」 新時代不同歌合・109「憂しと」
			心も		心を	心は	万代集・恋五・2589「心を」 新時代不同歌合・109「心も」
	恋三	1529	夜は	15	宵	宵	秋風集・恋中・855「宵」
玉葉集	雑四	2324	着るぞ	33	着る	濡る	
			思へば		聞くには	聞くには	
	雑五	2545	思ひ	28	病	病	万代集・雑六・3589「思ひ」
続千載集	恋二	1440	干す方も無し	21	干しぞわづらふ	干しぞわびぬる	
			唐衣		我が袖は	我が袖は	
			袖の		ごとに	ごとに	
	恋二	1441	方	22	人	人	
続後拾遺集	恋三	839	露	13	露の	露の	秋風集・恋中・814「露」
	恋三	840	別れは	14	我さへ	我さへ	秋風集・恋中・815「別れは」
新千載集	恋二	1181	長き	17	長き	闇の	
			淵に		淵と	淵と	
			ふ（ぬイ）る		経る	寝る	
	恋二	1182	濡れし袂ぞ	18	泣き明かすらん	泣き明かすらん	

※32番歌、続古今集の重出、1229は忠義公、1370は本院侍従作とする。1229は為家、1370は追加撰者による選入か。

万代集	恋二	2055	おき居て	10	おき居て	思ひて	
-----	----	------	------	----	------	-----	--